

「蟬と朝顔と夏見舞い」（広尾の掌編小説6）

友人からの手紙を読み終えると、ちょうど初蟬がちらほらと聞こえた。

季節はめぐるのでとそっと教えるような若い声をしていた。

蟬が響かせる夏の挨拶は、

君も誰かに挨拶しなよ

と語りかけてきているようにさえ感じる。

そうね、と独り言ちて机の引き出しに手をかけた。

切手や一筆箋、住所録が入った引き出しの奥から便箋セットを引っ張り出した。

広尾の雅やかな和の雑貨店「和らぎや」で
一目惚れして買った便箋セット。

淡い赤紫に色づく朝顔が描かれている。ちょうど小暑を過ぎたこの時期に主役となりそうだ。



あまり字は上手いほうではないから、というのを言い訳にして
昨夏もお手紙を書きそびれていた。

お世話になった人には時折ご挨拶の手紙は出していたけれど、
それも忙しさに流されて近年は年賀状で済ませてしまっていた。
友人にならメールやメッセージアプリですぐに連絡をとれると思う
と、よけいに筆をとることも少しばかり億劫にさえなっていた。

けれど今年は忙しさや字の拙さを嘆いて手紙を書けず仕舞いに終わらせたくなかった。

読み終えたばかりの手紙をまた眺めた。

風鈴が描かれた紙面から今にも音が聞こえてきそうだった。

流れるような筆跡で、彼女の近況と私を気遣う言葉、

そして落ち着いたらまたお茶しましょうと綴られていた。

丁寧な字からその人柄がよく伝わってくる。

この手紙を書いている姿が目に浮かんでふっと口元が緩んだ。

メールもそれなりにやり取りしているのだけれど、

私と違って筆まめな友人は手書きの便りをよくくれた。

疫病対策に外出を控えるよう世間が騒ぎ始めると、彼女からの手紙はメールより増えたようさえ感じる。

元気でいてね、という気持ちが一番伝わるのが手紙だと思ったのだろう。

深呼吸をして万年筆を手にとった。「和らぎや」の便箋は普段使っているものより何倍も上質な和紙で、思わず背筋がのびる。

初蟬のあいさつ届く文月にきみの言の葉 朝顔^{わら}咲う

上手な字でも表現でもないけれど、友人に想いを馳せながらゆっくり綴っていけば便箋はうまっていった。

完

作・天風凜（あまかぜりん）